

《論文》

高等学校教育の調理実習に見る、人間力の向上

湊 敏 文

近年、新型コロナウイルス感染症の影響で調理実習は感染のリスクが高いと考えられる活動とされ、授業の実施が難しくなり、行わない学校やオンライン上での授業に変更した為、グループでの作業活動や生徒各個人の技術力の習得状況など見極めがつかない状況になった。高等学校家庭科では、自己及び家族の発達と生活の営みに必要な知識と技能を、小学校家庭科、中学校技術・家庭科の上に積み重ねて習得し、生活をよりよくするために主体的に実践できるよう資質・能力を育成することを目指している。

調理実習と青年期における人間力の向上との関係性を明らかにするために本調査を行うことにした。現役の家庭科教員ならびに調理実習を高校生まで体験した18歳から22歳を対象とし、調査を実施し、人間力にどう結びついているかを考察した。

キーワード：調理実習、青年期、人間力向上、コマ数、大人

I. はじめに

1. 新型コロナウイルスへの対応

ここ数年、新型コロナウイルス感染症が学校教育現場にも大きな影響を及ぼした。特に高校における実技・実習科目は授業運営方法そのものを変えざるをえない状況に陥った。新型コロナウイルス感染症初期において、複数での飲食が感染拡大に繋がるとされた。そのため、グループで調理し、試食をすることに意義を持つ調理実習は、授業体制が揺らぐまでに至った。

令和2年2月28日に文部科学省より「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」(令和2年2月28日)¹⁾が通知され、一斉に教育現場は休業となった。その後、「新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言」(令和2年5月1日)²⁾が通知され、学校教育は再開されたが、様々な制限がかかることとなった。「家庭科における調理などの実習」については、感染のリスクが高いと考えられる活動とされ、感染拡大防止の観点から行わないこととされた。そのため、調理実習を行わない授業や教員のデモンストレーション映像をオンライン上で確認し、学習する授業に変更したことにより、グループでの作業活動や生徒個人の技術力・知識の習得状況などの見極めがつかない状況になった。

家庭科教育における調理実習は「生きる力」の養成も担う。「知識の理解の質を高め資質・能力を育む『主体的・対話的で深い学び』『何ができるようになるかを明確化』『知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共

有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理』³⁾とある。家庭科における調理分野は、古代から見られる人の営みである。歴史的にも古くから存在し、現代まで至っているのは、人間の成長過程に必要とされてきた。

2. 歴史を振り返って

『古事記』『日本霊異記』『古昔物語集』などにも、日々の日常生活の中で調理を行うことが「生きる力」に繋がっていることが読み取れる。

縄文時代頃は、子どもの遊びと言えれば大人の真似をすることであった。幼年期に大人の真似をすることで、生活・礼儀・仕事の術を身につけて、社会に溶け込んでいった。持田⁴⁾によると、平安時代の生活は学校などなく、大人のいるところには必ず子どももいたとある。子どもは大人の手伝いや、一緒に仕事をする事が多く、生活する中で特に取り分けた教育を受けるのではないが、生きて行くために必要な学びを、周りから学んでいたのだろうとある。

石塚⁵⁾によると、戦国時代の武士の住まいは夫婦別居、子は母と同居が一般的だった。原田⁶⁾によると、戦国時代は戦乱の時代で戦になると平民とて戦い駆り出された、民の子でも寺に預けられ、農村でも生活水準が上がり紙幣経済が発達してきた。数え15歳の少年が自分で奉公先を見つけ、自分の努力と才覚で出世していく事が出来たと記されている。中世鎌倉になると、それまでの通い婚から徐々に夫婦同居へと変化していった。男子は武士の世継ぎとなるため、読み書きなどを学びに仏教寺院に通い、女子は武士の女房となるためのしつけが施されたとある。吉田兼好は『徒然草』の中で、「人に必要なのは、一に食べもの、二に着るもの、三に住むところ。これに葉を加えた四つのほかを求めるのは贅沢だ」との旨記している。人にとっての衣・食・住の必要性は、すでにこの時代に明確にされている。

室町時代になると、1549年に日本へキリスト教が伝えられ、布教活動が始まる。フロイス⁷⁾によると「ヨーロッパの子どもは青年になっても、なお使者となることはできない。日本の子どもは10歳でも、それをはたす判断と思慮において、50歳にも見られる。」「我々の子どもは、その立居振舞に落ち着きがなく優雅を重んじない。日本の子どもはその点非常に完全で、全く賞賛に値する」「われわれの子どもは大抵公開の演劇や演技の中でははにかむ。日本の子どもは恥ずかしがらず、のびのびして、愛嬌がある。そして演ずるところは実に堂々としている」とある。

古代は幼年期を大人の真似をすることで、生きる力を自然な形で学び成長し、大人へなったと言える。平安時代も生きて行くための技術、大人の役割や礼儀などを学んだと推測できる。これは大人になり、集落の人として生きて行く力や共存できる人間力を養ったと言える。現代の高校生と同じく社会へ出るための力を養っていたと言える。

戦国時代も公家や武士の子は、およそ12歳～16歳ぐらいで元服し1人の大人としての扱いを受けた。明確に男子・女子の役割別な教育や教え、しつけが始まった。男子は「武士の世継ぎとなるため、読み書きなどを学びに仏教寺院に通う」ことで教養を、女子は「武士の女房となるためのしつけ」で家事全般を教育され、生活の為の知恵・知識を学んだ。この頃に良妻賢母の形が出来上がったのではないか。この時代も15歳前後で元服し大人になっている。人間としての成長過程で15歳頃から大人としての社会とのつながりや責任をもって行動ができると考えられる。現代の青年期に当たる年齢である。現在の家庭科教育の使命である、社会に参画し、

家庭生活とともに身近な人々とよりよい人間関係を築くための「コミュニケーション力」を身につけることと同じである。

3. 調理実習の変遷

1871（明治4）年に太政官布告により文部科学省が設置され教育行政機関とされた。現代の学校制度が作られたのがこの頃である。平等に子どもが教育を受ける体制が整ったのである。明治時代に入っても、農家が多く存在していた。家族構成で言えば、祖父母・父母・子どもであり、父が畑仕事の中心である。教育が平等に受けられるようにはなったが、まだまだ農家が多い。それまでは子どもも働き手の1人として家族の中での役割分担があったが、子どもが学校に通うことになったことにより働き手が減り、家族運営・家庭運営の形に大きな変化が生じたと考えられる。

江原⁸⁾によると、教育制度上では1881（明治14）年「小学校教則綱領」⁹⁾に現在の家庭科科目に相当する科目が新設された。これは科目名が「家事経済」であり、その中の1分野として「割烹」が載っている。図1によると、欄外下に「●裁縫ハ女兒ニ限り」、「▲家事経済ハ女兒ニ限り」と規定されている。「家事経済」の中に「食物」「割烹」の記載も見られる。「割烹」とは、「肉を割き、煮る（ニル）」ことを意味しており、日本料理の調理を指す言葉である。当時は、調理と言わず「割烹」と言う言葉が世間に浸透していたのかもしれない。授業としては座学のような講義形式であり、実習は行われなかった。また授業の運営方法に関する制度上の規定も無かったようである。

その後、制度上では、1881（明治14）年高等女学校令¹⁰⁾が定められ、それに基づいて1903（明治36）年に高等女学校教授項目¹¹⁾に「二割烹の実習は第三学年に於いて凡そ十回之を課するを常例とす」とあり、調理実習が実施されるようになっていった¹⁰⁾。家事は「家事整理上必要ナル知識ヲ得シメ兼テ勤勉、節儉、秩序、周密、清潔ヲ尚フノ念ヲ養フヲ以テ要旨トス ……」とある¹⁰⁾。

学年	性別	算術	国語	歴史	地理	理科	音楽	美術	体育	その他
第一学年	男子	算術ノ基礎	国語ノ基礎	歴史ノ基礎	地理ノ基礎	理科ノ基礎	音楽ノ基礎	美術ノ基礎	体育ノ基礎	裁縫
	女子	算術ノ基礎	国語ノ基礎	歴史ノ基礎	地理ノ基礎	理科ノ基礎	音楽ノ基礎	美術ノ基礎	体育ノ基礎	裁縫
第二学年	男子	算術ノ進歩	国語ノ進歩	歴史ノ進歩	地理ノ進歩	理科ノ進歩	音楽ノ進歩	美術ノ進歩	体育ノ進歩	裁縫
	女子	算術ノ進歩	国語ノ進歩	歴史ノ進歩	地理ノ進歩	理科ノ進歩	音楽ノ進歩	美術ノ進歩	体育ノ進歩	裁縫
第三学年	男子	算術ノ進歩	国語ノ進歩	歴史ノ進歩	地理ノ進歩	理科ノ進歩	音楽ノ進歩	美術ノ進歩	体育ノ進歩	裁縫
	女子	算術ノ進歩	国語ノ進歩	歴史ノ進歩	地理ノ進歩	理科ノ進歩	音楽ノ進歩	美術ノ進歩	体育ノ進歩	裁縫
第四学年	男子	算術ノ進歩	国語ノ進歩	歴史ノ進歩	地理ノ進歩	理科ノ進歩	音楽ノ進歩	美術ノ進歩	体育ノ進歩	裁縫
	女子	算術ノ進歩	国語ノ進歩	歴史ノ進歩	地理ノ進歩	理科ノ進歩	音楽ノ進歩	美術ノ進歩	体育ノ進歩	裁縫

（出典 文部科学省学制百年史編集委員会 学制百年史資料編

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318010.htm

図1 小学校教則綱領（抄）（明治十四年五月四日文部省達第十二号） 小学高等科

表18 高等女学校(4年制)の学科目別週回教授時数

計	手 芸	教 育	体 操	音 楽	裁 縫	家 事	図 画	理 科	数 学	地 理	歴 史	外 国 語	国 語	修 身	学科目
															学年
二八	一	一	三	二	四	一	一	二	二	三	三	六	二	二	第一学年
二八	一	一	三	二	四	一	一	二	二	三	三	六	二	二	第二学年
二八	一	一	三	二	四	二	一	二	二	二	三	五	二	二	第三学年
二八	一	一	三	二	四	二	一	二	二	三	三	五	二	二	第四学年

(出典 文部科学省学制百年史編集委員会 学制百年史

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317630.htm)

図2 中学校・高等女学校の学科課程：高等女学校の学科課程

1911（明治44）年に「高等女学校及実科高等女学校教授項目」¹²⁾ となり、「割烹」の文字はなくなり、「飲食物の調理実習」となっている。江原⁸⁾によると、理科の実験的な実習から食物の実習に代わっていき、高等女子の人間力の教育に移行していると推測できる。同じ時期に高等小学校において、理科に「家事ノ大事」が加えられる。1919（大正8）年「家事」¹³⁾ が理科から独立した科目として制定され、1926（大正15）年に必須科目となる。持田⁴⁾によると明治から大正にかけては、児童の自由・自主・自発・個性を重視する大正新教育と言う教育思想や教育実践されたとあるが、子どもを学校に専念させることが出来る家庭は少なかった。その後、1933（昭和8）年国家家事教科書¹⁴⁾ が発行された。

1939（昭和14年）年「教育審議会 中学校に関する要綱」¹⁵⁾ には「実験実習を重んじ知識を具体化すると共に心身鍛錬に資すること」が記されている。実習を通じた精神面の育成が含まれてきたのが、この頃である。1941（昭和16）年に閣議決定された「人口政策確立要綱」¹⁶⁾ で、食物・調理教育重視に関わりのあるものとして「高等女学校及女子青年学校等に於いては母性の国家的使命を認識せしめ保育及保険の知識、技術に関する教育を強化徹底して健全なる母性の育成に努むる事を旨とすること」「国民栄養の改善を図る為、栄養知識の普及徹底を図ると共に、栄養食の普及、団体給食の拡充をなすこと」とあり、この頃の社会背景として「男性が社会で働き、女性が家庭を守る」意識が教育の面においても存在していたことが読みとれる。また、国としては国民の健康維持・子どもの成長を目的としていることも読み取れる。1943（昭和18）年の中等学校令¹⁷⁾ に伴う改定まで教育制度上での大きな変化は見られないが、各地で家事研究会が行われ、栄養学や戦時体制など教育内容に影響を与えた。

1945（昭和20）年第2次世界大戦終戦後、新たに家庭科と言う教科が制定された。これは戦後、生活改善に取り組むことが求められた社会背景がある。西之園・中村¹⁸⁾によれば、大きな教育制度の基盤として、民主主義国家の憲法に基づいて、1947（昭和22）年に公布された「教育基本法」および「学校教育法」により、民主的な教育制度が確立されている。女子教育の向上と民主的な家庭建設を目指す新しい教科として「家庭科」が成立しているのも大きな変化であるとある。家庭科と言う教科は「技能教科ではない」「女子のための教科ではない」「家事科と裁縫科の合科ではない」という3つの否定によって定義されたが、その後、中学校・高等学

校においては、技能教科との位置づけは弱くなったが、家庭科は女子教科として位置づけは強くなっていく²¹⁾。戦後において、戦前の家事・裁縫の流れを汲み、幾度かの変化をしたようだが、まだまだ「良妻賢母」養成科目として扱われている側面が読み取れる。とりわけ調理は数多くの料理を網羅するがごとく繰り返し調理実習を行いながら、主に調理技能の習得をめざして行われるようになった。

その後、1989年告示 学習指導要領¹⁹⁾において、中学校・高等学校においても家庭科が男女共修となった。食生活の自立をはかる視点から、日常的な調理技能の習得が位置付けられるようになった。まだまだ、良妻賢母の考えが浸透していたであろう社会背景の中、「家庭科の男女共修」は教科「家庭科」における大きな変化だと言える。

現在に至るまで、指導要領の変遷を辿ってみると社会背景的に明治時代は「家庭」を考え、大正は「家族」の事を考えながら個人の精神的成長も加わっている。昭和は食物・調理教育重視になり、健康維持・子どもの成長が目的となり、栄養食という言葉も現われてくる。戦後は主に、調理技能の習得をめざすようになったが、食生活の自立をはかる視点から、日常的な調理技能の習得が重要視された。成人の前段階となる高校生において、自立して生活をできるように学習内容が規定されてきたといえる。歴史を遡ってみても、調理実習は学校教育が始まった時代から設定されている科目であり、教育にはおいては必要な科目と言える。

4. 高等学校「家庭科」の方針と現状

現在、高等学校における教科「家庭科」において設定されている学習内容等の現状はどうなっているのか。「今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎え予測が困難な時代になっている。少子高齢化が進む中で成熟社会を迎え一人一人が持続可能な社会の担い手として、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長に繋がる新たな価値を生み出していく事が期待される。また変化の一つとして進化した人工知能（AI）が様々な判断や身近な物の動きがインターネット経由で最適化されるなど社会が大きく変わると予測もされる」。このように高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 家庭編²²⁾に教科目標は記載されている。今回の改訂の基本方針を踏まえ、育成を目指す資質・能力を三つの柱により明確にされ、教育課程全般に関わる目標を柱書として示すとともに、(1)「知識及び技能」を、(2)「思考力, 判断力, 表現力等」を、(3)「学びに向かう力, 人間性等」の家庭科としての改定された目標を示している。

また、平成18年2月の文部科学省中央教育審議会において、教育内容等の改善の方向として、人間力の向上を図る教育内容の改善²⁰⁾がうたわれている。最新の学習指導要領では、その「人間力」の向上という部分が目標としている実社会や実生活との関係性の中での「生きる力」をより具体化したものとしたという方針が示されている。社会的な視点としては、内閣府人間力戦略研究会の「人間力戦略研究会報告書」²³⁾を基にした「人間力」という考え方がある。「人間力戦略研究会報告書」によると、人間力は「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力と定義したい」となっており、次の通り構成要素として整理され、これらを総合的にバランス良く高めることが、人間力を高めることといえる、とされている。

【人間力の構成要素】

- ①「基礎学力（主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力）」「専門的な知識・ノウハウ」を持ち、自らそれを継続的に高めていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」、「創造力」などの知的能力的要素。
- ②「コミュニケーションスキル」「リーダーシップ」「公共心」「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」などの社会・対人関係力的要素。
- ③「知的能力的要素」および「社会・対人関係力的要素」を十分に発揮するための「意欲」「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」などの自己制御的要素。

文部科学省においては、教育内容等の改善を「人間力」の向上という視点で取りまとめている。内閣府においても「人間力」に焦点を当てた報告書²³⁾をまとめている。このことから、人間力の向上に家庭科が必要であると読み取れる。構成要素を現代の高校における学習指導に当てはめて考えてみる。

特に③にある「知的能力的要素」は基礎学力・専門的な知識・ノウハウ、言わば「学力・知識」、
「社会・対人関係力的要素」はコミュニケーションスキル、言わば「友人関係」「リーダーシップ」「自己制御的要素」は社会・対人関係力的要素・意欲、言わば「忍耐力」と言い換えられる。現在の高校のカリキュラムや指導要領はこれに当てはめて授業運営・指導を遂行していると言えるだろう。

高校教員としての経験上、現在の高校においては、生徒自らが主体的に学び、学習意欲を高めていけるように、個々の興味・関心または将来の進路に合わせた科目を自らが選択できるように、選択科目を多く設定した教育課程を編成している。また、「総合的な探究（学習）の時間」においては、変化の激しい社会において探究的な見方・考え方を働かせ、課題を解決し、自己の生き方を考える能力を育てることを目標としている。そのため、生徒自らが考え、行動に移せるように、できるだけグループでの取り組みを設定し、課外授業の計画・事前学習（修学旅行・社会見学・職場体験など）を行い、コミュニケーション力の育成も目標としている。

学校外活動（課外活動）について、国立青少年教育振興機構²⁴⁾によると、日本の高校生は趣味やアルバイトなど自分自身のことに高い関心を示し、意見表明活動や地域の交流活動、社会活動などへの関心は米・中・韓と比べて低いことが報告されている。また、インターネット上で「実際のしりあいとのコミュニケーション」を「よくする」と80%弱の高校生が回答している。「生徒自治活動に参加したいか」には8.3%、「参加してもよい」を含め、40%程度になっているのに対し、「学校の運営や今後の方針について、学校が生徒の意見を求める必要があるか」に対して90%を超える高校生が「ぜひ求めるべき」「求める」と回答している。

自らが意見を言える活動等には興味がなく、積極的ではないが、自分たちの主張、意見や希望には耳を傾けてほしい、受け身な態勢であることが読み取れる。また、日本の高校生には、そもそも声を上げてほしいような雰囲気や風土がない、行動をしても仕方がないといった「諦めの感情」が常態化している可能性も指摘されている。「若者の声を聞くように変わるべきなのは、大人の方ではないか」や、「受動的な自分本位」に基づいていると言えるかもしれない。他人を責めることもしないし、迷惑をかけることもしない。しかし、しなくてもいいことは無理にリスクを取ってする必要もない。ただ乗りできるところにただ乗りするつもりはないが、皆が乗らないところには、あえて乗らなくてよい。「自分のことを守りたい」という深層心理

の表れかもしれないとまとめられている。このような性質を持つ高校生に対峙していく必要があるのが、現在の教育現場であるといえる。

このような社会状況の中、古くから「生きる力」に直結する調理を学ぶということ、家庭科における調理実習は、「生きる力」をより実社会や実生活のなかで具体化した「人間力の向上」にどれだけ貢献できているのかを本調査において明らかにする。

Ⅱ. 調査方法

現在の高校という教育現場、特に家庭科における調理実習において、学習指導要領に示されている目標を達成しようとする教員の想いはいかに生徒に伝わっているか、調理実習は青年期である生徒の行動や考え方、先輩や後輩といった社会構造の中での行動にいかに関与しているのかをインタビュー並びにアンケートを用い、調査を行った。

1. インタビュー調査

- ①実施時期 令和4年7月
- ②対象者 大阪府下 3高等学校 現役家庭科教員 8名
- ③実施方法 対面にて
- ④目的 教員から見た高等学校家庭科における調理実習の現状の把握ならびに調理実習から見える実習科目が与える影響

2. アンケート調査

- ①実施時期 令和4年6月～7月
- ②対象者 令和1年度・令和3年度に高校を卒業した人間生活学科食クリエイトコースの学生ならびに他大学に在籍する学生
- ③実施方法 Web形式
- ④目的 高等学校家庭科における調理実習への意識把握ならびに実習科目が与える受講生への影響

Ⅲ. 結果および考察

1. インタビュー調査

インタビュー調査対象者より得られた回答は次のとおりである。

- ① 実際に実習を担当している教員から見た実習の魅力は何か。
 - ・自分自身で衣・食・住を考えられること。
 - ・片付けや掃除、ちょっとした修理・裁縫、良く言えば自分で食材を調理し、食事が摂れるような生活を出来るようになること。
- ② 生徒への指導において、心がけていることは何か。
 - ・家庭科の授業、調理実習を通して、自分でしっかりと生活することができる力を身につけられるようになること。

- ・調理実習を通して何が大事なのか、また、それを伝えている。
- ③ 生徒の成長を感じるのはどのような時か。
 - ・学校生活や調理実習にも慣れてきた頃、段取りの良いグループは完成も早いし、片付けも時間内にできるようになること。
- ④ 今後、生徒にはどのように成長してもらいたいか。
 - ・自分の食べた献立や食事バランスを考慮し、次の食事内容をしっかりと自分で考えて購入するようになってほしいと考える。
 - ・「自立」ではなく「自律」
 - ・自分でしっかりと生活できる力をつけてもらいたい。
- ⑤ 先生自身、生徒だった頃の調理実習の経験はどうか。
 - ・料理が完成した時に達成感を感じたことが印象に残る。
現在の生徒も感じていると思う。
- ⑥ 生徒にこれからどのような力を身に付けてもらいたいか。
 - ・これだけ商店が多い消費社会で物を買うなどは言わないが、自分でも作れる事を理解してほしい。
 - ・家庭科の授業、調理実習を通して、自分でしっかりと生活ができる力をつけてもらいたい。
- ⑦ 調理実習において、生徒にどのような事を大切に成長してもらいたいか。
 - ・包丁使いの技術や、味付けの良し悪しよりも、自分が生きて行くのに大事なことを見逃してほしくない。
- ⑧ その他
 - ・現在の学校教育においては、各学年すべてで調理実習を行う十分な時間数は確保できない。
 - ・昔と比べて、調理実習に充てることのできるコマ数は減少した。
 - ・可哀そうだが、現代社会において片親または、血縁関係（親の離婚・再婚）が無い人の1つ屋根の下で2人だけになる生活などは珍しくもなくなってきている。
 - ・数年前に比べると、大学や社会人になると1人暮らしも多くなってきている。

以上より、多くの教員が生徒に調理実習を通して生きていくうえで大事なことは何か、生きていくうえで身につけるべきことを伝えるように心がけていた。包丁の使い方等の技術面だけでなく、栄養といった理論・知識に関することも授業内容に盛り込んでおり、生徒自身のこれからの生活に活かして欲しいと考えている。容易に不自由なくなんでも手に入る現代社会で生きていくには、自分自身で健康的かつ栄養面を考えた食生活や金銭的なことを含めた経済面も考慮しながら生活を送ることが重要となる。今現在の自分にとって大事なことは何であるか、何を優先すべきであるかを自分自身で判断しなければならない。

高校生にもなると調理実習にも慣れており、多くの生徒が準備や片付けを行うことはできる。「やりたくない、嫌いな作業はやらない」「得意なことだけをする」傾向のある生徒は一定数存在するが、学年が上がるにつれ、減少していく。それは、「後輩にいいように見られたい」「先生に対して自分が出来ていることを認めさせたい」といった感情が見え隠れし、青年期の特徴

ととれる行動が見られるようになると教員は感じている。「自立」より「自律」することを望んでいる。

調理実習は次の過程により授業を行うため、より青年期における人間力向上に役立っているといえる。

- ① 教員のデモンストレーションを見て料理の作り方を覚える。このことは、「学力・知識」を自分に取り入れることに結びつく。それが出来なければ授業についていくことができない。
- ② 指定されたグループで共同作業に入る。これは「友人関係」「リーダーシップ」を養う事に繋がる。皆で協力し合って作っていく。
- ③ 最後には片付け作業などで「忍耐力」が高まる。不得意であっても、やりたくなくても自分達の使ったものは自分達で片付けなければならない。

まさに内閣府における人間力向上の定義、知的能力的要素・社会・対人関係力的要素・自己制御的要素にこの結果は当てはまると考えられる。また、歴史をたどっても、年齢的に15歳～18歳ぐらいが社会的なルールが体に精神的に身につく年齢と言える。高等学校学習指導要領²⁾の「家庭運営」の一環として調理実習の時間を増やす事や、カリキュラム的に授業が無理ならもっと早い学年、例えば小学校低学年（現在では掃除時間や給食当番がある）でも簡単な準備や片付けを取り入れた学校生活や授業を組み入れるのも今後の課題となるのではないか。これは古代からの人間が持っている、又は、生物的に脳や体が自然に身につける行動であり、現在のように成長期に構い過ぎるとかえって身につかない。個人差はあるかもしれないが、15歳～18歳ぐらいが社会人となるルールが理解でき、行動が伴うことができる年齢と言えるのではないだろうか。

もう一つ今回の調査結果において考えさせられたことは、学校教育における人間力向上の壁になっているのは、現在の消費社会ではないかということである。現在の社会において、コンビニエンスストア数・各地にあるショッピングモールでの商品アイテム数や内容は、昔に比べて大きく進化を遂げている。生活に密着した便利グッズ、格安で手に入る衣料、ほとんど出来上がった食材やお惣菜など。学校における家庭科の調理実習で学んだ調理技術や知識を習得することの意味が薄れているように感じる。高等学校学習指導要領²⁾にそって学習を進めていったとしても、社会の流れが安価・安心・完成度の高い商品を求める傾向にある。

少額のお金で食べ物や着る物が手に入る。ましてや、1人暮らしや少人数家族になると手間暇を考えるとそれらを買って揃えてしまう。このような生活で自ら何かをしようとする人間が育つか。一方で、数十年前には無かった、携帯電話・空気清浄機などお金の使い道が随分変わっている。空気（空気清浄機）や水（ミネラルウォーター）・お茶に費用をかけるなどは考えられない時代であった。現在の生徒を見ていると何も覚えなくても生活はできるが、それを実行しようとする費用がかかる。塵も積もれば山となり、親からのお小遣いでは不足し、アルバイトをしなければ、学生生活そのものへ負の影響が及んでしまう実態も見受けられる。

これらインタビュー結果と国立青少年教育振興機構の報告書¹⁰⁾と重ね合わせても、「声を上げてほしいような雰囲気や風土がないなどが常態化している」「諦めの感情」「受動的な自分本位」「自分のことを守りたい」や、「やりたい事だけする」「得意な事だけする」「嫌な事はしない」

といった状況が現在の高校教育現場の声と一致する。しかしながら今回の結果は、学校といった場では見受けられても、これが必ずしも家庭で生きてくるかは別の問題であるとする。高校生にとっては公の場であり、社会との接点となるバイト先等でミスをすると思われるが、金銭が発生するから我慢するだろう。しかし学校では甘えてしまう傾向がみられる。学校も社会的な場であり、公の場であるという認識の薄い現実が浮き彫りになっている。また社会情勢的に教員が生徒を叱ることがなかなか難しくなったのも影響しているだろう。生徒へ「言い聞かせる」ことは限界にきているのかもしれない。

戦後、経済の高度成長期が終わるころから子どもに対しての教育・しつけの在り方が変わってきたと言える。幼少期はお手伝いをしていたかもしれない子どもたちが小学生高学年ぐらいになるとお手伝いより勉強優先の生活へ移り変わっていく。昔の言葉になったかもしれないが、親の代わりに買い物や近所に届け物などをする「お使い」という風習があった。「お使い」を任された子どもは、自分なりに頑張っ、たどたどしい言葉使いで敬語を使い、頼まれていることをこなし、相手もそれを「良くできました」と優しく見守ってくれた。社会全体で子どもを育てる世の中であった。今現在も、もっと親が子どもを信じて、自分達の代わりに子どもが出来る事は子どもに任せるべきと思えるが、ゲームやSNSに夢中で嫌がる子どもが想像できる。現在の子どもは、何でも「与えられる世代」と言った言葉が似合いそうだ。

2. アンケート調査

アンケート調査は、当初、現役の高校生各学年への実施を検討した。しかしながら、各学年において調理実習を行っていない現状を踏まえ、小学校から高校卒業まで調理実習の経験者である18歳～22歳までの大学生を対象に実施した。

回答者は、男子45名、女子91名、計136名となった。

回答結果は次のとおりである。

- ① 「調理実習は好きだ」との質問には、
「好き」と答えたのが94.1% (45名)、「嫌い」と答えたのが5.9% (8名) である。
- ② 「包丁を使って切る作業は好きだ」の設問には、
「好き」と答えたのが86.8% (118名)、「嫌い」と答えたのが13.2% (18名) である。
- ③ 「試食(食べる)は」との質問には、
「好き」と答えたのが95.6% (130名)、「嫌い」と答えたのが4.4% (6名) である。

この3つの質問より、座ったままの授業ではなく、実習は動きを伴うため、座学に比べて活気がある、「切る」などの作業は毎回何かを作り上げる、食材から料理へ変化させる達成感がある、「食べる」に関しては、通常の学校生活に変化が生まれ、試食することで毎回終結する、そして次の学習への興味を抱かせることができると言える。

- ④ 「調理室の掃除は」との質問には、
「好き」と答えたのが42.6% (58名)、「嫌い」と答えたのが57.4% (78名) であった。
- ⑤ 「あと片付けは」との質問には、
「好き」と答えたのが43.4% (59名)、「嫌い」と答えたのが56.6% (77名) であった。

この2つの質問から読み取れるのは、好き・嫌いに大きな違いは見られないが、調理実習は、試食して終了と認識している生徒がみられることである。人として食してすぐに動くのは億劫になりがちだが、あくまで授業中としての動きが望まれる。また、学校は公の場であって個人の生活の場では無い事を意識させることが必要である。共同作業が要求される調理実習は、コミュニケーション能力や自己制御能力を養うには必要科目と言える。

- ⑥ 「下級生の整理・整頓・片付けは出来ている」との質問に、
「出来ている」との回答が49.3% (67名)、「出来ていない」との回答が50.7% (78名)であった。
- ⑦ 「自分達の整理・整頓・片付けは出来ている」との質問に、
「出来ている」との回答が89% (121名)、「出来ていない」との回答が11% (15名)であった。

この2つの質問から、上級生による下級生の整理整頓に関する評価は、出来ている、出来ていないのどちらでもないと言える。しかしながら、自分たちに対する評価は出来ているとした人が90%となった。

- ⑧ 「片付けや掃除をやらない人がいる」の質問に、
「いる」との回答が77.2% (105名)、「いない」との回答が22.8% (31名)であった。
- ⑨ 「学年が上がると（最上級生）片付けや掃除をするようになった人がいる」の質問には、
「いる」との回答が69.1% (94名)、「いない」との回答が30.9% (42名)であった。

「片付けや掃除をやらない人がいる」の質問に、80%弱の人が「いる」と回答していることから、学年・クラス関係なく、数名は掃除や片付けがやりたくない・不得手な生徒が存在していると言える。その生徒の役割を周りの人が補うため、時間が必要となり、授業時間内で終わる事が厳しくなる。学年が上がると今まで出来ていなかった人が、出来るようになったと感じている人が約70%存在する。また、自分自身もその場で求められる整理・整頓ができるようになったと評価しており、合わせて周囲の状況も認識している。自分に求められる役割を認識し、行動に移せるだけの力を身につけたといえるのではないだろうか。

- ⑩ 「調理実習で習った料理を家族に作った事がある」との質問に、
「ある」との回答が66.9% (91名)、「ない」との回答が32.1% (45名)であった。
- ⑪ 「家で炊事の手伝いをよくする」との質問に、
「する」との回答が63.2% (86名)、「しない」との回答が36.8% (50名)であった。
- ⑫ 「年上（学校・家族を含む）の人には敬語を使う」との質問に、
「使う」との回答が91.2% (124名)、「使わない」との回答が8.8% (12名)であった。

この3つの質問より、家庭での役割や家族とのコミュニケーションがあるかどうかを確認している。「調理実習で習った料理を家族に作った事がある」の設問に対して70%弱が「ある」と答えており、「家で炊事の手伝いをよくする」との質問と傾向が似ていると考える。高校生

になると多くの生徒が反抗期も終わり家族との会話も増えているのではないか。「敬語」に関しては、クラブ活動やアルバイトといった社会的な組織での人間関係において学んでいることも考えられ、自分で使えると感じているものが多い結果となった。

やりたくないことであっても、「学年が上がるようになるようになった人がある」ことから、小学校・中学校・高校と何度も調理実習を体験してくると、集団における自分の役割や責任が理解出来るようになり、行動にも現れてくると考えられる。

今まで「片付けや掃除をやらない人がある」の質問で、「いない」との回答より、「いる」との回答が約3倍であった。「学年が上がるようになるようになった人がある」の質問で、「いる」と答えた人が、「いない」と答えた人の約2倍以上であった。出来るようになった人があると感じているものが多いことから、今まで「片付けや掃除をやらない人」が調理実習において人間力が上がったと言える。

質問「学年が上がるると片付けや掃除をするようになった人がある」の回答をクロス集計表 χ^2 の2乗検定にて分析した。

表1 「学年が上がるると片付けや掃除をするようになった人がある」の設問のクロス集計表

実測値 (単位：人)	い る	い ない	合 計
男 子	35	9	45
女 子	59	32	91
合 計	105	31	136

表2 表1の数字で χ^2 の2乗検定結果

期待値	い る	い ない	合計
男 子	34.74	10.26	45
女 子	70.26	20.74	91
合 計			136

n=136 P \leq 0.00488有意 n = 人数

よって、「学年が上がるると片付けや掃除をするようになった人がある」と感じることに、性別関係なく、優位な差が見られたということは、その場面で必要とされる自らの役割を認識できるようになり、行動に移せるようになったことを裏付けていると考察する。

IV. まとめ

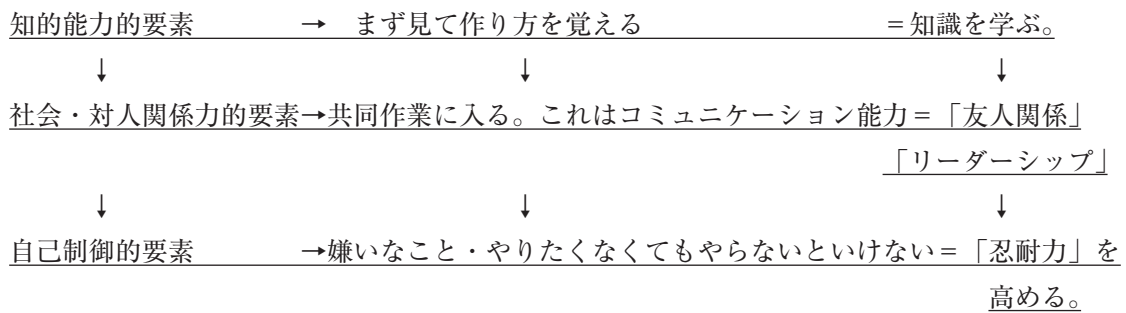
2022（令和4）年4月1日より成人年齢が18歳と引き下げられたことに伴い、高校生にとって政治や社会を身近に感じなければならない時代となった。自らの考えを積極的に言えるようになり、他者と協働して課題や問題点を見付け出し、解決できるように成長していかなければならない。沢山の情報があふれる世の中で何が正しい情報かを見極め、学校で学習した知恵・知識を生活の中で活用して日々を送って貰いたい。

古代から戦国時代ぐらまでは、子どもから大人になる過程には家族内での労働が結びついている。戦乱の時代も数え15歳の少年が自分で奉公先を見つけ、自分の努力と才覚で出世していく事が出来た。数え15歳は現代の中学生である。江戸時代まで公家や武士の子は、およそ12

歳～16歳ぐらいで元服し、1人の大人としての扱いを受けた。当時の外国人は、日本の12歳～16歳は大人と同じぐらいの能力があると評している。

明治の教育制度が出来るまでは、大人と行動を共にすることで社会に適応する力、すなわち人間力を自分のものにする知恵や技術を自然と学び、行動に移せたのは前述のとおりである。明治に入って文部省が設置され学校制度が始まったが、やはり対象は15歳～18歳ぐらいである。その中で、調理実習は、歴史的に見ても学校教育が始まった時から設定されている科目で、その重要性は認識されていたと考える。家庭科としての調理実習についても、改定を繰り返し、現在の形体系になっている。

「調理実習」に見る現在の高校生に求められる力を内閣府の「人間力の向上」²³⁾の構成要素に合わせて考えてみる。



よって、実習授業のみならず、小学校の低学年から様々な準備・片付けを体系的に取り入れた学校生活にすればよいのではないか。学年が上がるにつれ、自然と「生きる力」すなわち「人間力」を身につける事が出来る。その経験が、今後の人生に役立つと考える。

今回の結果より、調理実習を各学年で行えるような教育課程を編成し続けていけることが、より高校生の人間力を向上させる一助となるのではないだろうか。

時代は繰り返されるというが、令和の親子関係も見直す機会になってきているのではないか。家庭環境も随分と変わり、共働きや一人親の家庭といった様々な形がある。また、学校内の教員の世代間はどうかだろうか。多忙な教員にとって、ベテラン教員から若手教員へと教育に関する様々な経験や知見をどのように伝えていくのかも課題の一つかも知れない。高校生たちを取り巻く環境や、学校側が想像もしないような課題が複雑化・困難化する社会での対応は、筆者も高校教員としての勤務で経験したこれまでのように、教育現場の自助努力だけでは太刀打ちできかねない事態に直面することもあるだろう。そのため、今に立ち止まらず、常に問題意識をもって授業の運営を行っていく必要があると考える。

V. 謝辞

本研究を実施するにあたり、適切なアドバイスを頂いた府立S高等学校の藤平先生、インタビューを快く受けて頂いた私立S高等学校西村先生、私立H高等学校の池田先生、府立S高等学校の藤田先生・奥平先生・高橋先生・伊藤先生・他1名の先生、本当に貴重なお話をありがとうございました。

新型コロナウイルス渦の中、高校とは言わず教育現場での生徒・保護者、変化する指導要領

に対応されている教員の皆様に敬意を表します。アンケート調査にご協力頂いた学生の皆様、ありがとうございます。貴重な資料を閲覧させて頂いた、大阪教育大学附属図書館にも感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 新型コロナウイルス感染症対策のための小学校, 中学校, 高等学校および特別支援学校等における一斉臨時休業について (令和2年2月28日) https://www.mext.go.jp/content/202002228-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (参照 2022年6月3日)
- 2) 文部科学省 新型コロナウイルス感染症対策の現状を踏まえた学校教育活動に関する提言 (令和2年5月1日) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/156/toushin/mext_00339.html (参照 2022年6月3日)
- 3) 文部科学省 平成29・30・31年改訂学習指導要領 (本文、解説) 高等学校学習指導要領の改訂のポイント https://www.mext.go.jp/content/1421692_2.pdf (参照 2022年6月3日)
- 4) 持田京子, 「我が国の子どもの生活と地域連携の歴史からの一考察 - 「小学校と大学の連携授業」の可能性を追って-」『埼玉純真短期大学研究論文集』第13号, 2020, pp.49-60.
- 5) 石塚裕之, 「鎌倉のとおき〈第51回〉“結婚”の形、いま昔」『神奈川県全域・東京多摩地域の地域情報紙 タウンニュース 鎌倉版』2018年12月14日号
- 6) 原田知佳, 「にほんの古典文学から読む子ども史」『教育福祉研究』第37号, 2011, pp.62-78.
- 7) ルイス・フロイス (著) 岡田章雄 (訳注), 『ヨーロッパ文化と日本文化』, 岩波書店, 1991, 第3章
- 8) 江原綾子, 「日本における学校調理教育の史的起点に関する一研究: 中等学校令 (1943年) 公布の前後を中心に」『日本の教育史学』36巻, 1993, pp.139-152.
- 9) 文部科学省学制百年史編集委員会 学制百年史資料編: 小学校教則綱領 (抄) (明治十四年五月四日文部省達第十二号) https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318010.htm (参照 2022年8月12日)
- 10) 教育史年表 (全国) 「岡山県教育百年の歩み」岡山県教育委員会 学制発布百年記念誌 (昭和47年発刊) から転載 <https://www.pref.okayama.jp/page/detail-81044.html> (参照 2022年8月12日)
- 11) 文部科学省学制百年史編集委員会 学制百年史「三 中学校・高等女学校の学科課程 「等女学校の学科課程」」https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317630.htm (参照 2022年8月12日)
- 12) 教育品研究所 (編), 『高等女学校及実科高等女学校教授要目』, 教育品研究所, 1911, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/810109> (参照 2022年8月12日)
- 13) 文部科学省 『実用家事教科書 上, 下巻』, 家事研究会 元元堂書房1919
- 14) 文部科学省, 『国家家事教科書』, 東京書籍, 1933, pp.66.
- 15) 文部科学省学制百年史編集委員会, 資料編: (三) 教育審議会 (抄) 1939, https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318176.htm (参照 2022年8月12日)
- 16) 国立社会保障・人口問題研究所, 「人口政策確立要綱の決定」『人口問題研究』第2巻第2号, 1941, pp.55-57.

- 17) 文部科学省学制百年史編集委員会 学制百年史「(三) 中等教育 中等学校令(抄) 勅令第36号, 1943 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318045.htm (参照 2022年8月12日)
- 18) 西之園君子・中村民恵, 「戦後における小・中・高等学校の家庭科教育の変遷(第1報)」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第30号, 2000, pp.11-29.
- 19) 文部科学省 旧学習指導要領(平成元年度改訂) 高等学校学習指導要領(平成元年3月) https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322503.htm (参照 2022年8月12日)
- 20) 文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会審議経過報告(平成18年2月13日) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212706.htm (参照 2022年8月12日)
- 21) 岩崎恭枝・徳蔵きみ・中沢きみ・堀籠平吾・吉田紘子, 「戦後教育の変遷 一家庭科教育一」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』13号, 1980, pp.73-84
- 22) 文部科学省 高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説 家庭科編 https://www.mext.go.jp/content/1407073_10_1_2.pdf (参照2022年6月3日)
- 23) 人間力戦略研究所, 『人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～』, 内閣府, 2003
- 24) 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター, 『高校生の社会参加に関する意識調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－』, 国立青少年教育振興機構, 2021